

名古屋オルガンの秋

コンサートシリーズ「名古屋オルガンの秋」はカトリック五反城教会のパイプオルガンが修復されたこと、そして、カトリック五反城教会を創立した神言修道会の来日100周年を記念して2007年に始められ、今年で開催10回目を迎えます。10回の何と早かったことでしょうか。今までの「名古屋オルガンの秋」を通して本当にたくさんの出会いとご縁を頂きました。今までご支援下さいましたみなさまに厚く御礼を申し上げます。これからも、「パイプオルガンの楽しさ」と「祈りの音楽による心の響きと幸せ」を名古屋より発信し、多くの方に「調和・ハーモニー」をお届けして参りたいと思っています。

五反城教会には1978年にドイツ・ケルン市のペーター社によって建築された30ストップの楽器が設置されています。日本にあるパイプオルガンの中でも歴史的な価値の非常に高い楽器だと言えるものでしょう。当時の五反城教会司祭であったドイツ出身の神言会司祭ヨゼフ・トナイク神父はオルガンが設置された1978年に「名古屋オルガン友の会」を創立しました。以来、2001年に解散されるまで名古屋オルガン友の会は数多くのコンサート、又はコンサートシリーズを開催し、名古屋のオルガン文化の重要な担い手として活発な活動を続けていました。当時は中部地方でも希少なパイプオルガンのうちの一台であったこの楽器を使用し、マリー＝クレール・アランをはじめとした世界中から来日した名オルガニスト達がこぞってコンサートを行っています。

名古屋オルガンの秋実行委員会ではこの伝統を受け継ぎ、名古屋を中心に多面的なパイプオルガンの楽しさ、素晴らしさ、教会音楽の心を継続的に伝えていけるように活動をしたく考え、「名古屋オルガンの秋」を催します。

なるべく多くの方にパイプオルガンという楽器の魅力に触れて頂きたいという方針から、基本的に決まった入場料は設定していませんが、今後の継続的な活動が可能となるよう、皆様がそれぞれのコンサートの価値に見合うと感じられるご寄金のご協力を心よりお願いいたします。

マックス・レーガー(1873-1916) 没後100周年

2016年度名古屋オルガンの秋では、ドイツ後期ロマン派の巨匠であったマックス・レーガーの没後100周年を記念し、マックス・レーガーという作曲家の作品を中心に取り上げたいと考えました。

現在マックス・レーガーの作品は、モーツァルト変奏曲などの数曲を除いてあまり演奏される機会に恵まれません。しかしレーガーが生きていた頃には、リヒャルト・シュトラウスと並んで最も有名な作曲家でした。またドイツ文化圏においては、多々のパイプオルガンの為の作品を通してそれまでになかったパイプオルガンという楽器の可能性を発掘し、オルガン作品を典礼・礼拝の場から純粋な芸術的作品として演奏会の場へと橋渡しをしました。

バッハの対位法技術、リスト、ワーグナー、ブラームスらドイツロマン派の流れを継承した作風ですが、創作活動中期には幻想曲とフーガニ短調op.57、バイオリンソナタop.72、弦楽四重奏op.74に見出せるような無調性への限界に達する作品を経て、後期は構造よりも響きを尊重した作風となり、隠遁者・ヘッベルレクイエムのop.144、未完成ラテン語レクイエムに代表される合唱と交響楽団の為の大編成の作品の様に光輝ような非常に美しい作品を残しています。同世代の作曲家にも大きな影響を与えたばかりではなく、シェーンベルグやR.シュトラウスが大変高い評価をしていたことが、彼らがレーガーの作品を日常的に演奏していたことから判ります。

レーガーのオルガン曲は、礼拝で使える簡素な作品から演奏時間が40分に渡るものまでを包括していますが、代表作品として挙げられる多くの作品を演奏するためには、大規模かつロマン派の作品を演奏するための様式を備えたパイプオルガンを必要とします。今回の名古屋オルガンの秋では、カトリック五反城教会に備え付けられている中型規模オルガンに見合った作品を中心に取り上げ、3回に渡ってレーガー作品の魅力をお届けしたいと思います。

コンサート開催に先立ちまして、朝日カルチャーセンター名古屋との共催で、特別講座「写真で辿るマックス・レーガーの生涯と作品」を開講いたします。カールスルーエ大学附属マックス・レーガー研究所よりご提供を頂いた数多くの写真資料を見ながら、マックス・レーガーという作曲家の生涯と作品を分かりやすくご紹介したいと考えています。コンサートをより一層楽しんで頂けるためにも、是非ご参加頂ければ幸いです。

コンサート1回目の10月23日「歌曲とパイプオルガン～後期の作品を中心に～」では、ソプラノの岡眞里子さんと共に、心に染み入る歌曲と、9つのそれぞれが短く、異なった魅力を放つオルガン曲を中心に演奏します。11月13日のコンサートでは、レーガーの作品と、レーガーに教えを受けた弟子たちの知られざる作品をご紹介します。日本では初演となる作品も少なくないのではないかと思います。後期ロマン派から私たちの生きる時代へと繋がっている音楽の脈絡を感じて頂ける機会ともなりますように願っています。最終回の11月27日には、レーガーが敬愛していたバッハの作品を編曲したもの、そして同じ賛美歌をテーマとして扱ったコラル編曲をバッハとレーガーの作品で対比しながらお聴き頂きます。幻想曲とフーガニ短調op.135bは、大規模な作品の中でも五反城教会のオルガンの魅力を損なうことなく演奏でき、なおかつ重厚なレーガーのオルガン作品を十分にお楽しみ頂けるものとして選曲しました。

マックス・レーガーという作曲家の美しい作品を通して、みなさまの元へ平安のひと時をお届けすることができますように願っています。

演奏者

岡 眞里子

Mariko Oka(ソプラノ)



ウィーン国立音楽大学大学院リート・オラトリオ科終了。オーストリア国家演奏家資格を取得。第3回新人音楽コンクール声楽部門第2位。バッハのカンタータ等、宗教曲、オラトリオのソリストを多く務める。リサイタル等コンサートに多く出演。現在、名古屋女子大学専任講師、愛知県芸術文化協会会員。愛知日本歌曲研究会会員。

トーマス・マイヤー＝フィービヒ

Thomas Meyer-Fiebig(作曲、パイプオルガン)



ドイツ・デトモルト音楽大学作曲科、同大学院作曲課程科卒業。1978年来日。以来、国立音楽大学及び大学院にて作曲科の教授として後進の指導にあたる。ドイツ各地の大学にても特別講義講師としてたびたび招聘されている。作曲家としての活動の傍らオルガニストとしても活発な演奏活動を続けており、1998年にはドイツのエルトツ山脈地方ナッサウのジルバーマン製作の歴史的オルガンにてCDを収録した。2015年国立音楽大学退官。国立音楽大学名誉教授の称号を得る。「名古屋オルガンの秋」実行委員。

吉田 文

Aya Yoshida(パイプオルガン)



ドイツ・ケルン音楽大学カトリック教会音楽科、並びにパイプオルガン科卒業。A級教会音楽家及びドイツ国家演奏家資格取得。バーダーボルン大聖堂オルガニスト常時代理、ケルン南部司牧地区教会音楽家等を歴任。名古屋オルガンの秋主宰。日本オルガニスト協会会員。名古屋女子大学専任講師。南山大学非常勤講師、南山エクステンションカレッジ、朝日カルチャーセンター講師。2015年度名古屋市民芸術祭特別賞受賞。